Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-01-15

私の教師生活――子どもを寿（ことほ）ぐ教育学 ログとガチャをこえて

石本，日和子

(Citation)
私の教師生活７――戦後教育実践に学ぶ――（2023年度日本教育学会近畿地区研究集会記録）:47-70

(Issue Date)
2024-07-28

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490428

私 の 教 師 生 活 7

――戦後教育実践に学ぶ――

日本教育学会近畿地区

――2023 年度――

私の教師生活――子どもを寿(ことほ)ぐ教育学
ログとガチャをこえて

講　演　者：石本日和子氏

(相愛大学講師。元兵庫県小学校教諭。教育科学研究会副委員長等)

日　　時：2023 年 5 月 27 日(土)14:00-16:50

場　　所：神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 A427 室

（川地）　それでは、日本教育学会近畿地区の研究集会を開始します。司会を務めさせていただきます神戸大学准教授の川地亜弥子と申します。よろしくお願いします。今日は、兵庫県で長く小学校教師として地域の教育に関わってこられ、そして、民間研やさまざまな研究会で中心的な役割を果たしておられる石本先生に、「母校」の神戸大学でご自身の教育実践について語って頂きます。今日の研究集会には、神戸大学で教員を目指す人、他の地域で教育学に関わる人、教師を目指す人たちにも参加頂いています。最初に一言ずつ自己紹介をして頂いて、石本先生にご講演頂き、その後に質疑応答の時間をとります。

では、石本先生、どうぞよろしくお願いします。

（参加者自己紹介　略）

私の教師生活――子どもを寿（ことほ）ぐ教育学　ログとガチャをこえて

講演者：　石本　日和子

1.　はじめに

神戸大学の教育学部の時の学生でした。ふまじめな学生で、体育会水泳部でしたので、なかなか教育学部までは上がってこずに、六甲台のあの汚い緑色のプールで泳いでいました。父が、お前を夜間の大学にやった覚えはないと怒るような学生でしたので、真面目なみなさんにお話しできるようなことがあるかなあと思っているんですが、頑張ってやってみようと思います。

子どもを寿ぐ（ことほぐ）っていうことについてお話します。いきなり結論から行きますが、私はこの言葉に行き着いたというか、コロナの時に、全面的に子どもを承認する、すげえなあって思わないと、やっぱり教師じゃないんじゃないか、そういうふうに思うようになったというか、思えるようにしてもらったっていうか…。子どもと、保護者と、それから研究者の先生たちに支えられて、そう思えるようになったっていう話をしたいと思います。今日は、ちょうど最後 3 月がコロナでなくなっちゃった 2019 年度の実践をお話しします。

最初に自己紹介がわりに、どういう教師だったかについてお話します。

私が神戸大学に入ったときは、相当変な人じゃないと教採には落ちない、と言われてたんですが、2 年生になった時に、いやちょっと滑る人がいるらしいよと聞こえ始め、3 年になったときは、半分くらいやばいらしいよという話になり、4 年生になると、いやーあんたは難しいだろというような変化がありました。今までたくさんごーっと採用されていたのがぎゅーって絞られたんです。西宮は 50 万都市なんですが、私の前々年度くらいまでは 100 人規模で新任の採用があったのが、私の時は 11 人でした。もう、ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅーって感じで絞られて。

こんなこと言ったら怒られるのかもしれないけど、本当に何にもできないような私でした。斎藤浩志先生という教育学の先生に教えていただいて――と言ったら「君は教えていただいてっていうほど学んだのか」ってあの世からお叱りが聞こえるようですが――斎藤

先生や土屋先生にお世話になりながら、すごく生意気な学生で、教育学なのだ私は、なんて思っていました。ですので、小学校の教師になる？なっちゃう？みたいな感じでした。

もっと自己開示すると、大好きな彼がいて、その彼と結婚して東京に行こうと思ってたものですから、教採はまあいいかという感じでやっていたのですが、体育会水泳部ということがヒットした（よかった）みたいで受かっちゃいまして、それで、教師になったっていう、ほんとにとんでもない新任でした。

資料にも書きましたが、わきまえない、可愛げのない、授業のできない、生意気な新任で、「あたしはお茶なんか入れません！」とか、職員会議で訳もわからず「はーい！！」みたいに言ってる新任だったので、校長には直接呼び出されました。今だったらパワハラなんですが、「君は教師に向いてない」って散々言われました。当時はバブルのちょっと前でしたから、長い髪で、ミニスカート履いて学校に行って、もうやめた方がいいんじゃないかとみんなも言い、自分でもちょっと内心で、向いてないんじゃないかなあ、と思ってました。

最初は 4 年生を持ったんですけど、3 年生の学級がそのまま持ち上がりになった 4 年生で、1 番持ちやすいクラスだって言われてたんです。それこそ、3 年生のときの先生は大変きちんとしてらした先生で、クラスはできてるから、あなたが行ったらもう子どもがしてくれるからねっていうようなクラスだったんです。

ところが、私みたいな権威のない、授業もできない教師が入ったら、秩序立って運営してる子どもたちから見ると、秩序を乱すっていうか、なんだあの教師は、となって、一人も言うことを聞かない。情けなくて。「前の先生はそんなことしてない」、「先生の話全然わかんない」、「もう学校が嫌になった」とか、わーって言われて。また私も生意気だから、前の先生は漢字ドリルを忘れたら練習帳を 3 ページ書く、とかやっていたのですが、「そんなのおかしいからもうやめ！」って言ったら、子どもたちが「うわーもう宿題やらんでいいんや、ヒェーラッキーラッキー！」とかみんなで騒ぐというような状況でですね、泣いて泣いて。学校の用務員さんに出てくださいって言われるまで黒板の前で授業の練習をするんだけど、練習をすればするほど自分の出来なさに絶望するような状況でした。

ぐっちゃぐちゃだから、もう校長もやめてもらったら一番良かったんだろうけど、困り果て、職場の先生たちも困り果て、「もう石本さんさあ、遊んだらどう？」って話をしてくれて。それで、武庫川が近くにあるんですけど、武庫川に子どもたちと遊びに行きました。ダンボールを持っていって、ソリでガーって滑って。それがもうめっちゃ楽しくて、初めて小学校の教師になって笑いました。私が一番楽しかったのね。そしたらその行き帰りにね、今でも忘れないけど、あやちゃんっていう子が私の手をそっとに握ってくれてね、「先生、先生はなあ、あかんタレやろ、でもな、あやはな、先生がな、机のとこまで来てな、ここやでって言うてくれたらわかるの。だからあやは、前の先生より、石本先生の方が好き！」って言ってくれて。ああ、もう私は全然ダメダメで、生徒指導もできない、授業もできない、だけど、この子と手を繋ぐことはできるから、この子と手を繋ぐことのできる自分として生きていこう、みたいに思ったんです。それが最初です。あのとき、あやちゃんとか、そういう子どもたちが救ってくれなかったらきっとやめてたと思うんです。だけど、あのときのあやちゃんの手の温もりが、私を支えてくれたなあって思ってます。

そう言いながら2年教師をやってすぐ結婚しました。あの、結婚したのはさっき言ってた好きな人じゃなくてね。「あれー？　おかしいな、東京行くはずだったのに」、と思って、振られちゃって。失恋の痛みでですね、これはどうしようと思って、神戸大学の六甲台の食堂で、「あたし振られちゃったんだけどさあ、誰かあたしと結婚してくれる人いないかな」と言ったら、うちの夫が「はい」って言ったから、「ほんとに結婚する！？」って言ったら「はい」って言って。今でも愛のない夫婦なんですけど。いや、色んな夫婦があるからね、愛し合って結婚するのが一番いいと思うんですけど。愛はないんです、でも信頼はあるから。みんなは、いつ別れるのかなって私のことを心配してたけど、二人で年老いています。

結婚して、出産育休で自分の子どもを持って、何にもできなかったんだけど…。とにかくできることは（学級で）絵本を毎日よみきかせることと、学級通信を作ることと、そして、遊ぶこと。それから体育同志会とか、学力研って今でもあると思いますが――私教育学だったので、黒板の書き方なんていうのも分からなかったから――学力研の先生に基礎を教えてもらったり、全生研で生活指導を教えてもらったりしながら、だんだん教師になっていった、という感じです。

30代は、資料にも書きましたが、私にとっては非常に職場や教育が曲がってきた時期でした。兵庫県で言うと、県の知事部局に、兵庫県人づくり懇話会っていうのができて、５泊6日の自然学校っていうのを発表したんですね。これは、誰か研究してほしいと思うくらい、衝撃的でした。ちょっと今は感覚違うかもしれないけど、新聞に学校の教育課程の内容が発表されたということについて、校長以下みんな、市の教育委員長も怒った、そのくらいの衝撃でした。「なんで知事部局が勝手に自然学校４泊5日って決めるんだ」って。その中に、連合兵庫教組の石井委員長っていう人が座長として入っていて。教育課程の編成権を政治に取り上げられたような気が、私はしました。「えっ、子どもにどういう教育をするかっていうのを新聞発表で知るの？」ということで、西宮は大混乱をして。最後まで５泊6日の自然学校に行かないって頑張った学校もありました。その時に組合も分裂して、これも色々立場があるので乱暴には言えないんですが、簡単に言うと、教組が教え子を戦場に送らないというようなことを、一旦下げるみたいな話になりました。私は全教西宮に所属することになりました。それはどうしてかって言うと、この自然学校の発表があったときに、おかしいじゃないかって職員室中は思ってるのに、そのことを親に言ったらだめだって言われたんです。それは校長も言ったけど、組合も言ったわけ。勝手に「おかしい教育なんですよ」って言ったら親がびっくりするから、言ったらいけないと。職員会議でやるのはいいけど、親におかしいでしょって言ったらだめだと。それで、そんな簡単には私は折れませんって言って、出て、全教っていうところに行って、全教は父母と一緒に教育を作るんだというふうに言ってくれたので、そこで自由にはなったんだけど。教育って一体なんなんだろうって思って、そこに書いてある市民活動みたいなことをやりました。これはなかなか、面白くって。

で、そうやって暴れてるうちにですね、阪神淡路大震災が起こりました。この阪神淡路大震災の前の年に愛知いじめ自殺事件が起こって、子どもはダメだとか、教師はダメだって言われてたんだけど、地震が来て地が裂けたら、実に子どもたちはよく働いたし、教師たちは地域住民を守って頑張った。ここにまだ素敵な人たちがいるっていう…、エンパワ

ーっていうんですかね、今の言葉で言えば。エンパワーしなきゃいけないっていうことで『輝く笑顔再び』っていうような本を出したりもしました。

でもほんとに人は死ぬんだなっていうか…。昨日まで一緒にやっていた子どもが、瓦礫の下に埋まってしまうというような…。私はこの時は樋ノ口小学校というところに勤めてたんですが、子どもが 5 人死んだんですね。かわいそうにねえ…生きたかったやろう、と今でも胸が痛むんですけど。あの子とちゃんと笑えてたかな…と。あの子にちゃんと算数教えられたかなとかそういうことは思わない。あの子とちゃんと笑えてたかなとか、あの子学校楽しいって思ってたんかなとか、いうことを最初に思った時でした。

でもその時はまだ知見もなかったから、私たちに。だから、子どもってこんなすごいんだよ！頑張るんだよ！見て！っていう、そういう感じね。その時のそのうずめられてた中でなんかこう、なんていうのかな、屈辱感とか恥辱感とかそんなの全然思わなくって、すごいでしょ？子どもってすごいでしょ？っていう元気な時代で、そんなことをやりました。

で、阪神淡路大震災で、もう全然ガンガンにダメになっちゃって、教育課程をどう編成するか、みたいなことも現場にガーっておりてきて、今までは県で決めてたのにいきなりバーっておりてきた。それで、今でも覚えてますが、ストーブを囲みながら、「なぁ、あしたどないする？」「どないする？　いや、子どもらまだしんどいやろなあ。明日とりあえず遊ぼか」「な、明日はみんなで遊んで、生きてる命を大切にして…」「なあ、亡くなった子かわいそうやったなあ、とか、しみじみ思えるようなことせなあかんなあ」、みたいなことで。今までは、教育課程の自主編成、とか言うと、めっちゃ賢い人が、きちんとしながらするもんやと思ってたんですが、私らできるやん、と思いました。子どもと一緒に生きるっていうことが、その狭い教育課程じゃなくて、大きな教育課程なんや、という話で、辛い体験だったけど元気になる体験だった、というようなことを考えていました。

一番元気な時ですよね、30 代後半から 40 代の元気な時で。樋ノ口小学校から、西宮の南の一番端の、どーんと突いたら海に落ちるっていう貧困な小学校に行きました。ポテチとコーラと下ネタ、で生きてる子どもたちなのね。最初 5 年生を持ったんかな。「みなさん、新しく担任になった石本です。よろしくね」って言ったら一番前の男の子が、あの子も必死やったと思うけど、「先生、ブラジャー何カップ？」って。もう必死なんだよ、向こうも。なんかこうちょっとやってやらなきゃいけないから。「え？ブラジャー何カップってあんた知りたいの？」「知りたい。何？何？」っていうから、「わかりました。ここでみなさんの前で言うのは個人情報ですから、ちょっと言えませんが、本当に知りたかったら後で二人で話しましょう。来てくださいますか？何時から来ますか？」って言ったら、「もうええ」って。「いや、私は言いたいで？あなたに。でもみんなの前で言ったらそれはいけないやろ？」って、そんなことがあって。小学校からタバコ吸ってるとか、フードを被って学校に来て、片腕伸ばして突っ伏して寝て、時々顔を上げてなんかいらんことをばっと言う、っていう、そういう人たちでした。地域からもむちゃくちゃ言われるし、学校の教師もむちゃくちゃ言うし、親もむちゃくちゃ言うみたいなとこだったんです。でもお母さんが、「いやでもね、先生あの子らの生活ってね、工場地帯なんですよね。夜操業すると（注電気代が安いので夜操業する）、そこに働きに行くの、時給がいいから。で夜いないんだよね、お母さんとかが。まあお父さんでもいいんだけど。で 1 年生の子が夜一人で寝てる」って言う。寝てるんだけど、ほんとに寝れてんのかなっていうような状況で、朝お母さん

帰ってきて、昼 2 時か 3 時ごろまで寝て、子どもらが帰ってきたら、お母さんがタバコをばーっとふかしながら、「だるいわー」とか言う。ご飯はしてくれるんだけど。

そういう生活の中で、ほんとにあの子たち、遊べてるんかなあ、みたいな話になり、子どもを責めるばっかりじゃなくて育ててやんなきゃいけないみたいなことを言ってくれるお母さんがいて、「親たま」っていう学習会をやりました。これは面白かった。団地から見下ろされてるような小学校だったんだけど、団地の全ての公園をプレイパークっていうのにして、1 日何してもいいから遊び回ろう、みたいなことをしたの。そしたら、今まで小学生のくせに下ネタ言う、タバコ吸うみたいな子が、最初関心なさそうにしてるんだけど、「え？泥？　触ったことないから触れへん」とか。「いや、あんたへタレやなあ」「正体見えたで、あんた」みたいな。水をびゃってかけたら「うわあぁぁ」とか言うから、「水びゃってやられたら怖いん。もっとやったろ」みたいな。そうするとなんか、かわいそうに、こう言う感覚も知らずに生きてきたのか、みたいなことがあって。

その時、3 代目の校長だったんですけど、校長がよかったんだよね。「やりましょう」っていう話になって、一日中遊び倒すっていう日を作ったんです。学校でね。運動場に穴掘ってもよくて、水撒いてもいいとか言って。バスケットゴールあるでしょ、バスケットのゴールとゴールの間を綱で結んでね、人間をこう滑らすみたいなのをやりたいって言うから、よしやろうって言ってやったりしたら、違う顔が見える。子どもって、関係性の中で生きてるから、学校の教師が「勉強しろ」って迫ると、「だるいわー」とか言うんだけど、「え、そうなの？　ここ穴掘りたいの？　一緒に掘ろうよ」って言うと、いや、「俺はちょっとあんまり、穴掘るの得意ちゃうから、お前掘ったら俺もちょっとやる」みたいな。いざ、ぎゃーって飛ぶってなったら、意外に怖がりやったり、そんなことがありました。

大工さんのお父さんが、たくさん板とか釘とか持ってきてくれて、一生懸命お家を作ってくれて、「先生なー、うちのはな、ほんま全然勉強もできひんしな、学校来たら怒られるばっかしやし、俺も忙しいから学校なんか嫌やってんけど、今日は楽しいわー。先生、こんなんやったら俺なんぼでも来たるわ」って言ってくれて。「ああ、学校っていうのは、賢い人は来たくなるけど、賢くないっていうか、なんかある種の制度っていうか、そういうとこなんやなあ」とか、「ああ、あの家に居られへん子こそ学校でさ、楽しくしてほしいやんかあ」みたいな話がだんだん学校でできるようになって。そうそう、味噌汁隊って書いてますけど、味噌汁隊って大したことないんですよ。お湯を沸かすことを教え、そして、その当時はカップ味噌汁はなかったけど、生味噌となんかを入れたらお味噌汁になるっていうのを教えて。それを家庭科の先生が、「いや石本さん、出汁を取るとか教えなくていいの？」とか。「いや、出汁取るなんて出来ひん。あの、ポテチとコーラよりは、お味噌汁とおにぎりの方がええで。味噌汁はあの生味噌買ってきてこうやって湯注いだら味噌汁なるやろ？　美味しいやろ？　って教えてやることからやろうや」みたいなこととか、簡単なご飯の炊き方を、教えたりしました。

広島の平和学習とか、性教育とかも。小学校の女の子をトイレに閉じ込めるみたいな事件が起こったりね、なかなか表沙汰には出来ないような事件がたくさん起こり続けるんですが、私も若くて元気だったし、みんなと一緒に、そういう子たちに響く学びっていうのを考えようよ、と一生懸命やりました。もちろん、国語とかも頑張りましたけど、そういうのをたくさん模索しました。

ただ、教育はどんどんどんどん曲がり始め、西宮は総合選抜制度っていうのがずーっと残ってたんですけど、地域の中学校から地域の高校に行く、私それで高校に行ったので、高校の受験勉強をしてなかったんですよね、高校ってランクがあるでしょ、でも西宮はほとんどなかったから、みんな名門高校だと思ってたのに、そういう制度が崩されたりとか。それから学区が拡大していったり、いろんなことがあって。それもいろんなところで出会ったお母さんたちと暴れまわってたんですけど、ことごとく討ち死に、うまくいかず。そして最後は教育基本法を活かす西宮市民の会っていうね、もうほんとに連日頑張ったんですが――資料にも「睡眠時間 3 時間が続く」って書いてありますけど――ほんとになんかこう、自分ではここで頑張らなかったらいつ頑張るっていう状態になっていったんですが、47 年教育基本法も変わってしまいました。

なんか、何やってるんやろ私、みたいなときに、この学校から西宮の中心の学校に移って、非常に攻撃的な男の子に会いました。お前なんか教師として認めへんぞ、みたいな。いろんなこと浴びせられたこともあったし、長年の疲れも溜まってたんだと思うんですが、立てなくなって。学校に行こうと思うと涙が流れて立てなくなって、それでうちの夫が、ちょっとおかしいで、休んだらええんちゃうん（いいんじゃない）って言って、半年間学校を休んで療養しました。よう半年で済んだなあって思うんですけど、辛かったです。鬱状態になってくると、幅もよくわからなくなって、がーんってぶつかったり、動悸がしたりとか、眠れないとか、そんなことがありました。で、新任の頃とは違う、深刻なあかんかもしれへん状態になったんですけど、考えてみたら私の苦しさっていうのは子どもの苦しさでもあるかもしれへんし、今まで割と正義の立場からというか、そういうの好きなんですけど、今でも好きなんですけど、そうじゃなくて本当に子どもの傍らでちゃんとした教師にならなあかんって思って、武庫川大学の大学院で田中孝彦先生のところについて、ハーマンを勉強したりとかしました。これも勉強したとか言ったらまた田中先生に、「僕はそんなふうに勉強したと言われるほど君が真面目にやったとは思えない」とか言われるかもしれませんが、一応頑張りました。

この辺りから、もちろん制度的なことは大事だし、私の立場で言うと、戦わなければいけない、怒らなければいけないって思うけれど、子どもと一緒に、子どもの声を聞きながら、どう生きていくかっていうことを考えるということが、一番政治的な行為ではないのか、というようなことをちょっと思い直して、子どもといることが、苦しいんだけど楽しい、楽しいんだけど苦しい、そういう感じになってきました。コロナ禍で、西宮の教育を考える市民の会っていうのを作って、教育に関して子どもたちを豊かに育てるっていうことに関しては、いろんな政党の右から左までの人たちと手をつなげるんじゃないか、みたいな教育マニフェストを作ったりもしました。基本的には、子どもたちの声を聞くことが政治的である、と自分の中に据わったのがやっと 50 代後半ですね。だからずいぶん普通のことをわかるのに何年かかってんねんあんた、って言われたりするんじゃないかと思ったりします。

2. ログとガチャに閉じ込められる子どもたち

今の子供たちは、ログとガチャに閉じ込められてると思っていて。ここはもう皆さんの方が色々詳しいと思うのですけど…。記録された自己の履歴を背負わされて生きるという

か、極端に言うと、学校によるデジタルタトゥーを入れられてるんじゃないかって思うほどです。ガーゲンの欠陥言説じゃないけど、問題を個人の内面の機能不全にすることで、具体的な関係や文脈から切り離して、成功した子ども、成功した親、成功・失敗した教師っていう風に、記録してしまうという。自分自身も、評価されるということを内面化してしまうことがあるんじゃないか、と思うんです。それから、ガチャっていうのは、安倍元総理のテロ行為を行ったあの宗教 2 世の問題なんかもありますが、もうそういうところに生まれ落ちてしまったらそこで生きなきゃしょうがないみたいな、とても狭い穴の中に嵌ってしまっているような感じがあるんじゃないかと思って。そうすると、子どもの 1 番近いところで、「いやそうじゃなくてさ、あんたの、その、しょうもないし、わけわからんし、あかんたれやし、何やってもなんか、悪いけど、ビリばっかりつけなあかんけど、それが面白いやん」っていうか、少なくとも「私はあんたが好きやで」みたいに言える教師でないと生きられないというか、そこからやっぱり変えないとダメなんじゃないかみたいに、思ったわけです。

3. 実践の紹介　4 年生で荒れた子どもたちと

その次です。実践なんですが、2019 年度ですよね。この学年は 5 年生で、私たちの挑戦って書いています。私ね、3 月の 25 日から 31 日くらいまで非常に評価の高い教師でございまして（笑）。いつもはね、言うこと聞かへんとか、こんなん言ってとか、校長に思われてるんですが、3 月 25 日になった途端に、校長先生が「石本さん、時間はあるかな」と言って、校長室の扉をパタンと閉め、「悪いねんけど、何年生思ってくれへんか」と。「え、私でいいんですか。だって私、人事評価制度も最低だし、校長先生に怒られてばっかりだし、自信ないなとか言うんですけど」「いや、頼む」。頼む頼むと言われて、大体荒れ果てたクラスを持たされるわけですよ。そしてここが私の弱点なんですけど、「いっちょやったろか」っていうか、「ダメです」って言ってそのまま（引き受けないまま）だったら、うまく生きていけるのに、「しゃあないな、ちょっとかましとこうか」みたいな性質で。いつもツボにはまるんですが、そういう（そうやって頼まれた）子どもたちでした。

小学校 1 年生の時は、校門で泣き叫び、怪我が多発しました。どの程度かと言うと、一休さんみたいにこうやって拭き掃除するでしょ。 そうやって拭き掃除せえって言ったらね、こうやって拭き掃除してた時に、ガーンって顔を打ってね、歯から血が出たとか、それから、雲梯させたら、途中でパッと手を離して脳震盪を起こしたとかね、もう大変っていう話になったんです。学校はどうしたかっていうと、何にもできひんような奴らを締めなあかんっていう話になって、小学校 2 年生の時は厳しい管理でルールを守らせた。管理が行き過ぎている先生が担任になって、不登校が増加したんだけど、静かで、落ち着いた状況にはなった。そうすると、3 年生も、その路線で行く。ところが、そろそろ保護者たちから、それではいややみたいな反発が起こり、非常に極端なその方が体罰問題を起こして、担任が総入れ替えになるみたいなことがあったんですね。4 年生は、そこまで行ったら指導が失敗したっていいということで、優しい指導に戻そうとなった。だけど、2 年生、3 年生と、厳しい指導で、ぎゅって締められてた子供たちが、ゆるってなっちゃったから、ひどい荒れに陥って、いじめ事件が頻発するみたいなことがありました。この子らが 4 年生の時は、私は 6 年生を持っていました。生徒指導の先生から 4 年生がエラいことになって

るから、見に行ってやってくれ、とか言われたんだけど、6 年生も大変だったから、全然この学年のことがわからなかったんだけど、5 年生で担任することになりました。

4 月は、石本ですって言ったら、もう長い間、瓦木小学校にいるから、えー石本先生やとか言ってくれる子が大体何人かいるねんけど、この学年は、担任発表の時「5 年 1 組の石本先生です」と言われて「はーい」って言ったら、子どもたちが下向くわけ。誰も見てくれない。これは、えらいことになってきたな、もう、それぞれがカプセルに入って、傷つかないようにしていると感じました。「皆さんこんにちは」って言っても通用しない。「皆さん」がいないから。だから、「おはよう」「おはよ」「おはよう」「おはよう」「おはよう」「あ、おはよう」っていう感じで、もう 1 人 1 人おはようって言わないと授業にならないという状況でした。もうしょうがない。1 人 1 人から始めようと思って。それで、「先生、学級の係を作るんですか」ときかれても「いや、作りません。やりたい人がやったらいいんじゃないですか」と答え、「え。そんなんでいいんですか」「いいよ、 やりたいようにやりゃいいじゃんか。係なんてなくても大丈夫だよ。それよりさ、なんかやりたいことがあったら、先生に言って、それ係にするから」みたいなことから始めました。

克という子の話をします。この子は、4 年生の時の荒れの中心です。資料には、純っていう子もいるでしょ。4 年生で激しいいじめを受けて、母は外国籍で。克は、その純を始めとして他の子に暴力を振るいまくった子です。この学年は荒れた子がクラスに 3 人いました。克が武闘派、とにかく暴力。それからおちゃらけ。それから、6 年生のとき知的に高い颯汰っていうのを持つんですけど、この 3 人で荒らし回る。その暴力の中心にいた克を持つことになりました。

4. 最初の授業参観は川柳で自己紹介

最初の参観日が迫ってきていて、一人一人の佇まいを表現できるような授業にしたいと思いました。だけど、子どもたちの“閉じられた”体では、まだ文章を綴ること、読み取りが難しいと思って、自己紹介川柳を作ることにしました。この時は、まだ文章を言う、なんてできひんから、「好きなこと何？」とか言って、カードに書かせて、「ゲームが好きです」とか、「鉄道が好きです」とか言って、それで川柳にしたんですね。「石本日和子です。ロックが好きです。『こう見えて　ロック好きだよ　ドンドンパッ』」とかいうようなの。「青空にカキンと響くホームラン」（将来の夢はプロ野球選手です）、「桜より桜餅が大好きだ」とか、 「喧嘩買う わかっているんだ悪い癖」とか、「喧嘩売る わかっているんだ悪い癖」とか。そんなふうな川柳をして、保護者から笑いと拍手が何度も起こって、「５年生　ここが勝負だ頑張るぞ」っていうのは私学受験目指してる…、みたいなのがあって。保護者の皆さんもなんとかしないといけないっていう風に心配してらっしゃるので、随分応援してくれるような参観日になったんです。

その中で純は、「頑張って毎日来るぞ学校に」。純はいじめ倒されてるから、怖くてもう学校に来れなかったんですね。学校もひどいんだよ、一番いじめてた克と一番いじめられてた純を一緒のクラスにした。学校は何考えてんだろうって思いました、見えてないっていうか。で、純のところは、お母さんが外国籍の方で、学校にもの言えないんだよ。純のお母さんもね、日本の学校ってよくわかんないから、そしてどう言ったらいいかわかんないから。心配はしてらっしゃるの、いいお母さんでね、優しくて。でも、お母さんは、学

校は嫌でも行かなきゃいけないって割と純粋に思ってらして。他のお母さんとのコミュニケーションがないから、学校に言いに行くみたいなこともできなくて。純は可愛い子でね、「今年は僕はいじめられないと思う。頑張る」なんて単純に言ってしまうんだけど、でもそうやって、みんながカプセルに入って何も言いませんって言ってる時に、一番先に純が、「先生、僕頑張る」って言ってくれたのが嬉しくて。「頑張ろうな純」っていう風なことでした。

で、一番ひどい克は、「サクラサク　僕が小学5年生」（今年は頑張ります）って。もう何を頑張るねんとか、頑張ってまたいじめるんかとか、形式的なことだけ言うなとか思ったんですけど、頑張ってね、と。提出に来た時に、いい川柳だねと言って。克「参観日用です。4月と言えば桜ですから」私「あっそう」と。で、授業参観で発表する時は前に出なくて隅っこの方でボソボソって。克が授業参観で発表する時はね、教室はシーンとするのね、あいつやあいつやって。保護者もわかってるからね。純のことは応援したいと思うから純がなんか言ったらみんなニコニコってするんだけど、克がなんか言ったらいや…っていう感じがあったりしました。克の腰巾着の遼ってのもいるんですが…。そんなスタートでした。

学級全体が本当にカッチカチから、保護者の皆さんも応援してくれて、少し緩んだかな、というような手応えのあるスタートを切りました。

5.　正解だけで終わらせない授業を

道徳です。とにかく5年生の授業、手応えがないっていうかね。みんなもう自分の意見を言うのが怖いから、めっちゃ早く、すっすすっすっと行くわけ。誰も、「聞いて聞いて、私こう思うねん」って言わへんから、もう、たたた、たたたた、と終わって、しょうがないから歌おうかとか。これは典型的な教材で、「休み時間にソフトバレーボールをしていた時のこと。相手チームから返ってきたボールが、私たちのチームのコートの中にラインギリギリで落ちるのが見えた。ところが、同じチームのみんなは『ボールがラインから外に出ていた』と主張した。コートの中にはっきり入っているのを見たのは私だけのようだ。もちろん、相手チームの人たちは『コートの中に入っていた』と主張した。『そんなことないよ。絶対ラインから出てたよね。みんな』ってナナミが言うと、みんなも『うん、出ていたよ』と口々に言った。私は、ボールはコートの中に入っていたと言うべきかどうか迷っている。私はどうして迷っているのでしょう。あなたが私だったらどうしますか」って。しょうもない教材なんですけど。葛藤教材、モヤモヤしなきゃいけない素材なわけで。私がそうやって読んで、さあ、「私」だったらどうしますか、って言ったら、克がはいって手あげて、「『私』はチームが損するから黙っていると思います。でも、嘘はいけないので、僕だったら正直に言います。」って言うんです。そうだよねって言って、みんなはどうですか、って言うと、終わってるからね、もうそれで。誰も発言しないんです。

で、困ってしまって、いや、でもさ、ちょっと教科書読んでみよか、って言って。「このような出来事で、僕や私が友達とのやり取りの中で迷ったり悩んだりしています。皆さんは、どうすればいいのかがわかっていても、その通りに行動できなかった経験がありませんか。わかっていてもできない自分を見つめ、どうしてできないのか考えましょう」って書いてあるんだよねって言って、だからさ、一言でさ、終わったらいけないんじゃないか。

この教材は克の言うのは正解だけど、どうだろう。こう言ったらさ、また克が「わかっていてもできないのは、弱いからです。強い心を持って、弱い自分に打ち勝てばいいと思います。正しいことをするには勇気がいりますが、心を鍛えればいいと思います。」って言う。へえ、克ってすごいね…。で、10 分なんです。あと 35 分あるでしょ。どうするよっていう話で。

だけど、いじめの人間関係の中で、学校の雰囲気に照らして方向付けられてきてね。学級の雰囲気の中心の 1 人が克で、それに評価され、管理されてきて、本当に言いたいことではなく、うまく雰囲気にはまることが大切だったから、克が正解を言ってるのに、えーとか言われへんっていう。

それで、「わかった。道徳の教科書の正解は克だ。さすが。でもさ、悪いけどさ、この教材は悩んでほしいんだよね。道徳の教科書だと、心を鍛えればいいよねって思うけど、心を鍛えたいけど、ちょっと無理っていうストーリーに変えてみようか」って言ったんです。苦し紛れです。なんでもいいからさ、どうストーリーを変えれば正解がちょっと変わってくるかなとか言ったらさ、あの、輝っていう子が――可愛いくて、給食をよく食べる子なんですけど――「休み時間のソフトバレーボールの試合ってええな。俺らドッジしかできひん。休み時間長いんかな」とか。他の子は「そんな話誰もしてへんやん。は？」とかって言ったんだけど、でもとにかく、わけのわからん輝が言うことが大事なわけ。輝、いいねって。そしたらさ、また遼ちゃんが、「どんだけ運動場広いんやろ。ネット貼ってあんのかな。コートないと線引きだけで終わる」とかいうんですね。そういうことが大事。書いてないことを言うのが大事、ナイス、とか言って。かっちゃんが――賢い子なんですけど――「審判がいないから揉めるんですよね。審判がいたら揉めないです」って言うから、私が「あのね、かっちゃん悪いけどね、今、揉めてほしいから、揉めない設定はやめて、揉める方向でなんとか考えてほしい」って言ったら、「あ、それなら、実は審判がいたんだけど、気が弱くて頼りにならないってことにすれば、揉めるんじゃないですか」とか言ったら、私がそうそうそう、そうだよ、揉めよう揉めようとか言って。そうすると、非常に賢い、ゆいちゃんっていうのが、「ナナミがキーパーソンですよって。ナナミが言うと、みんなが従ったんだから、ナナミのキャラ立てがいるんじゃないですか」って。それで、「わかった、みんなが文句を言えないキャラってどんなキャラだ」っていう話になりました。

そうするとね、今までこう無関心で寝てる（ふりをしてた）人たちが起き上がって、「文句を言ったら切れるようなキャラを言っていいんですか」みたいな感じで。「いいよ。道徳の話だからさ。これはやった方がいい」とか言って。「ナナミが執念深い性格だったら言えない」「勝負に異様にこだわる人だったら言えない」「家来を飼ってる人だったら言えない」「陰で悪口を言う人だったら言えない」っていうんですね。で、「ナナミって嫌なやつやなー」って。「いや、ナナミは嫌なキャラなんだけど、『いや』って思ってることがバレたら外されるから、友達を装って付き合わないとダメなんですよ。権力持ってるっていうか、支配するキャラ」とか言うんですね。そしたらこったんっていうのが、「要するにさ、チームの中で身分制度があったらアウトだよね。」とか言って、「身分制度って何？」とかいう話になって、「言いたいことを言える人は身分が高い、言えない人は身分が低い」、「ルールを味方にできる人は高いけど、ルールで弾かれちゃう人は低い」、「先生も恐れさせる人は身分が高い、先生から常にうんざりされている人は身分が低い」っていう話がだーっと出

てくるんです。で、それを全部黒板って書くの。嫌なやつだねーと。みんな克のこと言ってんだよ、嫌なやつだねとか言いながら、ガーって黒板に書くわけ。でも、克のことじゃないからね、ナナミの話だから。ガーって書くの。

そうすると教室が熱を帯びてきて、普通になって、いじめがかわいそうじゃなくなるっていう話っていうか、空気っていうか、日常っていうか…。つまり、その中を私たちは生きてきたんだよ、みたいな話がガーって出てきて、この子たちがすでに身分や序列を感じて生きて、非常に的確に描写していくことに、胸が本当に痛みました。でも、その時子供たちはすごく楽しそうで、そうそう、もっとこういうことを付け加えるといいよ、とかさ、まさに 4 年生の時の教室を彷彿とさせるようなことが出てくるんですね。だけど、言えなかったものを何かしら表現してるっていうのが、心地いいような雰囲気にガーっとなってくる。

そうすると、宮っちていうのが、「あのさ、みんなは言えないって言うけどさ、僕は言わないって感じ」って言い出して。彼は荒れの中でも 1 人で前を向いて勉強していたっていう子なんだけど、「言えないっていうのは言いたいけどできないって感じだけど、言わないのは、言いたくない。知らないことにしたんだ。言ったって変わらないし、誰に言ったからいいかわかんないし、コートにボールが入ったとか入らないとか、そんな小さなことどうでもいい」。小さなことであんたら散々揉めてさ、入ってたとか入ってないとか。

実際、4 年生の時、克が、「入ってたやろ、出たって言うやつ誰やねん、土下座せえよ」とか言ってさ、土下座さしてさ、頭をこう踏むみたいな事件が起こったんだよ。だけど、こういうことを宮っちが言う。そこは問題じゃないとか言うんだよね。それで、どうでもいいとかで終わらせたくないけど、緊張した静かさが教室に流れて、さっきまでワーってなってたのが、ひゅーってなって。そうだねって、ナナミの話ができて面白かったねって。教科書を超える物語が作れるってすごいよ、って言って終わりにしました。この時はまだ、言えないのではない、言わないことを選択したっていう人が、言わない選択をしたことが何をもたらしたっていう風に考えてるのかな、とか、それは小さなことだったのか、とか、私の中では問いたい思いがわーって出るんだけど、我慢して。黒板見ながら、よくみんな言ったよね、本当にナナミって嫌な人だね、とか言って終わったのです。克は最初の 10 分間の正解を言い終わると、机の手を投げ出して寝ていました。

6. 作文を書こども、読みあう学級

なんやかんや言いながら学級が少しずつほぐれてきました。学級通信は書いてましたし、純がこんな日記を書きました。

僕の友達。僕の友達は武とマルちゃんです。友達になった理由をクイズにしてみました。①2 年生の頃、山下先生のお別れ会で漫才をした。②公演で遊んで友達になった。③なんとなく友達になった。答えは 1 です。2 年生の山下先生のお別れ会で、ピコ太郎の PPAP、ペンパイナッポーアッポーペンをしました。5 年生でまた一緒のクラスになって嬉しかったです。最近、2 人と遊んでいます。2 人とは家が近いし、遊んでいると安心できます。楽しいです。僕の話を乗っかって聞いてくれます。嫌な話も聞いてくれます。女子に近づくと、キャーキャー言われるとか、苦手な人の話とか、物を取られそうになって

嫌だったとか、悲しいことも分かち合ってくれます。ゲームの話や未来の話もします。僕たちが大人になったら、車も空を飛ぶかもしれません。ロボットが増えてきて、もっと便利になると思います。例えば、町全体をロボットが掃除して、街がピカピカになるといいと思います。みんなが楽しい気持ちになるように、風船を飛ばしたり、勉強を教えてくれたり、頑張れと励ましてくれる友達のようなロボットがいるといいです。僕たちの未来はどうなるかな。僕たちはどんなことをするかな。と気になります。未来に向けて頑張って勉強をします。

純が一生懸命作文を書くようになっていた時期で、可愛いなと思って私はこれを載せて読み合ったら、「クイズになってて掴みはオッケーって感じだね」とか、「すぐばれる設問が純らしいよね」とか。武とマルちゃんとは、本当に仲良しで、「一緒のクラスになってよかったね」とか、「未来について考えてるのがすごいと思った」とか、「自己紹介川柳も頑張ってたからやる気いっぱいなんだと思います」とかあったかい感じの感想が交流されて、少しずつほぐれていきました。こういう作文を読み合うようなこともでき始めて、言葉を差し出し始めてる気がしました。やっとカプセルから出てきて姿を見せてくれるような気がして手応えがある感じでした。

○「悪口はやめてください」と言う克

ところが感想交流が終わりかけた時に克が手を挙げて、「苦手な人の話ってどんな話ですか。苦手な人を教えてください」って言ったんですね。は？ってなって、本当に教室が息をのむというか、え？ってなってですね。克の腰巾着の遼が、「仲のいい人に苦手な人の話をするのは悪口なんじゃないですか」とか言って。私が「質問に答えたくない場合は、答えたくありませんって言っていいんだよ」って言ったので、純が「答えたくありません」って言いました。そうするとね、この時はまだクラスの中から「なんでも質問していいって先生が言ったよね」みたいなことがぶつぶつぶつと起こってきて。「なんでもいいって言ったけど、質問に全部答えろとは言ってないよ」とか、「でも悪口はいけない」みたいなことをぶつぶつという。

ここは私が押し切っちゃうんですけど、「よく読んでみて。悪口を言って楽しかったって書いてないよ。乗っかって聞いてくれる武とマルちゃんって書いてあるでしょ。否定しないで聞いてくれるから、悲しみが分かち合えて、未来に繋がるんじゃない。純がこの作文で何を言いたかったのか、もう一度読む必要があるんじゃない。先生はそう思うよ」と、ぐっと押したんですね。

そういうことを言うと、武が立って、これもちょっとすごすごかったんですけど、「純くんは悪口なんか言ってません。女子が逃げたり、純は普通にしてるのに突然怒り出す人がいたり、物を取ろうとする人がいて、純は困ってるんです。だから、困ってることの相談です」っておろおろと一生懸命話して。この武が、こうやって純のことをかばった、純がかばわれたっていうのは初めてで。武よくやった、って感じだったんだけど。

でも、克が周りを見ながら「困る？　何困ってるん？」みたいにすると、遼がヘラヘラって笑い、なんだか、武が一生懸命言ったことを受け止めて、深まろうとしてた子供たちが、深まれない。なかなか難しいなって。私が押す、武が言う。でも克はヘラっと支配

する。そうすると、そこで沈んじゃうっていう感じだったんですけど、さっきの輝がね、変な言い方になるけど、 本当に空気読めないんです。この輝が良くてね。「えー、でもさ、悪口って言うよな」とか言って、みんなが何言ってんねんこの緊迫したところでそんなこと言うな、って感じなんだけど、 女の子の何人かが必死になって、「いや、だからさ、悪口じゃなくて困ってる相談って武言ったやん」。だけど輝が、「いやー悪口って言うよな」って空気読まないで言うのね。で、純がもう涙目で、「だから僕は悪口言ってません」って言って、何人かが、「純の話ちゃうで」「純の話ちゃうやんな」とか言うんだけど、そういうおろろっとした感じで私をこう見るので、私は、「先生は悪口大臣です。苦手な人もたくさんいて、許せない人もいるから、お風呂の中で悪口を叫んでいます」って。

私本当に一番のストレス発散は、スポーツクラブで泳ぎながら、アホアホアホアホって言うストレス発散で、悪口をたくさん言いながら泳いでて、プールも可哀そうやと思いますけど。「じゃあとっておきの悪口聞かせてやるから、よう聞きや」って言って、「おのれら、よう聞きさらせ！　舐めとったらえらい目合うど！　お前、耳の中から手すーって突っ込んで奥歯ガタガタ言わせたろか！　それとも、その悪いド頭こんこんって上から殴って、胴体にめり込ませて、へその穴から世間さま覗かせたろか！　怒ってるから、触ったら熱いでえ、やけどすんで！　お前の母ちゃん出べそ！　ついでにお前も出べそ！　出べそ噛み切ってくたばれ！」って言ってやったの。それで佇まいを正して、嫌なことたくさんあるからねってね。もうこういう悪口をいっぺんいったらすっきりするねって言って。

子どもたちは、あの人何してはんねやろ、はー…、って感じだったんだけど、何人かが笑って。「先生こてこての大阪弁や。でも先生がそんなこと言ったらダメですよ。とげとげ言葉を使ったらダメだって道徳で習いました」って言うから、「アホかいな、大阪の伝統的悪口練習するのも大切な地域文化の伝承教育や。伝統の尊重は教育の重要課題になってまんがな。腹立ったら怒ったらええねん。抑え込まれて辛抱して私が悪うございましたなんてまっぴらごめんやし、先生はこれからも怒るし、悪口言いまくるで。燃える女や」とか言って、もうやけくそやからね。克に支配されてるから。負けるか、と思って、真っ赤に燃える〜とか言って、燃える女や！とか言ったら、もうみんなが、「あかん、あの人もうおかしくなってる。かわいそう」って。でも、別に克とは対立してないでしょ。悪口を教えてるからね。

輝はね、すごい喜んで。輝ちゃんってね、可愛い人なんです。「先生、めっちゃ面白い。ウケる。俺もやりたいから教えて〜」っていうから、「わかりました。じゃあまずね、あんたらね、目が弱い。ガンを飛ばすってわかるか。こうやってすんねん。あいつをやっつけたろうと思ったらこう睨まなあかん」みたいな話をしてね。で、じゃあガン飛ばし合戦をやろうとか言って、みんなで、飛びましたかとか言ったら、飛ばれへん〜、とか言ってやったんですね。

でもこれは、なかなか難しくて、関係を作っていくっていうことができない子どもたちだから、あの人を、睨んでるとか、あの人に言ってるんだっていうような練習がいるってことが分かって、ガン飛ばし、悪口ごっこっていうのが学級で流行ったんです。そんなこと言ったら怒られるけど。でも本当に流行ったんです。で、いろんな悪口が開発され

て、谷川俊太郎さんの悪口とか、いろんな悪口詩っていうのがあるから、そんなんを紹介して、大いに盛り上がって。まあそれは後の話なんだけど。

その時は純が来て、「僕の作文に嫌なこと言う人がいてへこみました」って肩を落として言うの。私が「いい作品は人の心を揺さぶるから議論になるんだよ。学級の傑作やね。武かっこよかったね」って言って、一生懸命私は応援しました。だけど純は、「先生は何があっても楽天的だから羨ましいです。僕は先生みたいにはなれません」、「そっか」みたいな話をして。

克のところに行って、「克さ、悪口言わないの。克、悪口面白くなかった？　教えてあげようか」と言ったら「結構です。」って。あの子なんなんやろって思いました。本当にこの時ぐらいまで私、克のことが大嫌いで、なんやねんあいつって思ってました。教師としては言ってはいけないことかもしれませんが、どうしても許せないっていうか、私が一生懸命やることに対して刃向かってくるっていうか。克っていうのはお内裏様のような顔をしてて、友達に対しても私に対しても、「差別しないでください。ルールを守ってください」って言ってて、手を組んでっていう感じなのね。お父さんは、やられたらやり返すっていう人で、お母さんは、家族のために生きてるような方なんですね。私はもう克の家庭も嫌いって言ったら怒られるんやけど、なんかもうわからんわ、もう本当嫌やわとか思ってて、職員室の中で、ほんまもうやってられへんわ、信じられへん、とか毎日言ってたんです。でもそれ言ってもしょうがないしなって思いながら、どういうふうにしたらいいのかなって、悩みに悩みました。大嫌いな克を私の中に位置づけるのにどうしたらいいかっていうことを、すごく悩みました。そうは言ってもな、と思えるようになったのは、私の中の失敗体験がたくさんあって、あのこともうまくいかんかった、このこともうまくいかへんかったみたいな、それで、ごめんね、ごめんねって思いながら、いろんな子が私の中に住んでいてね。「お前はまだそんなことやってんのか」「あの時の俺はこんな風に思ってたんやで」みたいなことを、私が勝手に心の中に住まわしてる子たちがいて、その子たちと一緒に対話しながら、克を分かっていかなきゃいけないと始めた 6 月でした。

7.　克のルール

学級会は全然やってなかったんです。4 月も 5 月も。学級会やったって、結局克の言う通りになるだけだから全然やらなかったんだけど、お誕生日会みたいなことをやってて、どの子も大事にしましょうみたいな。ようやく 6 月になって、いろんな学級のイベントを調整するのに学級会やらなあかんっていう話になって、学級会を初めてやりました。学級会、一番最初に何やるって言ったら、学級の目標みたいなことを決めなあかんのちゃうか、みたいな話になって、目指す学級像の話をしました。その時、ルールが守れる学級って克は言ったわけです。誰のルールやねん、またお前に都合のいいルールやろとか思ったんですが、ルールを守ってくださいがあの子の定番だから。そういうことを連発してました。例えば国語でグループ学習をしてる時に、純に向かって突然、「汚い！」って言うんですね。大きな声じゃないんだけど、あの子のすごい才能っていうか、みんながしんとした時に言うと、ヒィって感じになる。「人の嫌がることをしてはいけないのがルールですよね。今、鼻をほじって手を舐めましたよね。純くんやめてください」で、純が「ごめんなさい。」って言って。「アレルギー性鼻炎で顔全体が痒くなるから、気持ち悪いと言わな

いでほしい」とかモゴモゴ言うんですね。でもそれで手を緩める克じゃない。「鼻くそ飛ばす必要はないですよね」とか言う。それに同調する子が出る。「鼻をかむのは僕だけじゃないよ」って言って純が泣き出す。そうすると克は、「すぐ泣いて僕を悪者にするのはやめてください、卑怯です、アレルギーでもちゃんとしてる人はいます。だらしなくて不潔だから言ってるんです」と言う。で、もうどうしようもないから、私が体を入れて克の視線から守って、「克、気持ちが悪かったのはわかった。だけど、汚いなんて突然言うのはひどい。純に失礼だよ。泣いて当然でしょ。泣くことまで責めるってやりすぎだと思うよ」っていう風に言うんだけど、克は、「僕が我慢すればいいってことですか？　先生なんだからルール守らしてください」って私を睨む。今一緒にいる純が傷つくよりルールが大切だと本当に思ってるんかなと克の顔を眺めてしまうんだけど、私は。なかなかそれで解決するような問題じゃない。汚いは言いすぎかもっていうつぶやきは起こるんだけど、なかなかうまくいかない。純が気になって、話をしたいと思うんだけど、兵庫県の 5 年生は、教科担任制っていうのがあって、授業に行かなきゃいけなかったりして話ができなくて、給食の前に話したんだけど純が、「僕の運命は暗黒です」とか言って、話にならないですね。で、掃除の時間、純に、「あのさ純さ」って言ったら、克が寄ってきて、「今は黙掃の時間です。私語はやめてください。」って言うから、「あなたにとって大切なのは、泣いてる純より黙掃なのか。純を傷つけた自分の言葉に責任を感じないのか」っていう風に迫りたくなるんだけど、ここでルールがどうとか、そこが問題じゃないからもういいやって思って、ぐぐっと堪えた。

スタンダード訓練の中で、この子たちは 2 年と 3 年の間ぎゅうぎゅう締め付けられましたから。学校って何をしてるんだ、今を生きるのに都合のよい人間関係を訓練したのは、私たち教師や学校ではないのか。しかも 4 年生で荒れたのはルールを守れなかった子どもたちの責任だって言って、子どもと保護者を連日校長室に呼んだんですね。だから克を単純に責めたってお前も一緒かみたいな話になるから、それはしてはならんと踏みとどまりました。「純君がこっちを見て笑ってきたから、僕は傷つきましたから怒ってください。純の傷つきだけ先生はフォローするんですか」みたいなこと言うから、「そうなん」って言ったら、「いや、にこってしたけど、ごめんねっていう意味で笑ってないです」とか言うのね。つまり笑われたので傷つきました、って言うんですよね。「でもさ、今、純の話聞いてるから後でいい？」って言ったら、「純君の話が先で僕が後ですか」って睨んでくるんです。あかんと思いました。なぜなら、彼のお父さんからこんな手紙をもらっていたからです。「4 年生の時、授業妨害や他のお子さんへのいじめの問題で度々学校から連絡をいただきました。悪いことは悪いと厳しく指導してくださって結構ですが、家で子どもによく聞いてみると、毎回学校の説明と齟齬があります。　学校から謝罪を受けたこともあります。我が家の教育方針はやったらやり返すです。誰が一番悪いのか、問題点をはっきりさせ、納得できる指導をお願いします。間違いのない指導であれば体罰でも文句は言いません」。あー失敗したな。純に話すんやったら、克のいないところで話すべきやったなって。克の苛立ちは、私が克を悪者、克が純を攻撃してるっていうふうな見立てでやってるから納得できないのかな、と。

「ごめんね」って言って、克の話も聞くよって言ったんだけど、克はもう黙ってる。廊下の隅に行って、「なんで純そんな気になるん」って言ったら、「話を逸らさないでくだ

さい」って言うから、「いや、純が汚いって言ったのは君だからさ。学級のほとんどの人は先生と黒板の方向いてるから気づかなかったけどさ。さっきも純に笑われたって感じたんだよね。いつも純ばっかり見てる気がするんだけど」っていう話をするんだけど、「僕は傷つきました。差別しないでください」っていうことをずっと言う。顔付きが必死なんですね。

全然違うんだけど、何年も前に、俺なんか死ねばいいんやろって掃除ロッカーの上に飛び乗って叫んだギャオスくんっていうのがいて、ギャオスも、「お前らみんな死ね、俺が死ねばいいんやろ」としか言えなかったんだけど。それも辛かったんですけど、ギャオスが叫んでたことと、克の必死の顔。それはやっぱり、私の実践の中の弱さかもしれないっていうか…。私、ギャオスがね、ロッカーの上から叫ぶからね、ロッカーの上から教室見たらどんな気がするんやろって言って、教室のロッカーの上にこうやって乗ってたら、子供たちがみんな教室のロッカーの上に乗って、「先生この隅っこ感がええんちゃうか」とか、「ギャオスくんは怒鳴りながらも俺を見てくれって言ってるんちゃうか」とか言って、教室がほぐれるっていうような実践があったんです。ギャオスは本当に何を言いたかったんだろうっていうのはいまだによくわかってなくて、私は今でもギャオスに、あんたあの時何言いたかったんかなって思う時がふっとあるんだけど、そのギャオスと克が重なってくるっていうか、ギャオスが克を慈しんでるっていうか、そういう風に思い始めると、教師としての私を問い直すことがどうしても必要になってきた。

8. 教師としての私を問い直す

私は克をいじめの中心だと思ってて、純を克から守ってやらなければいけない。学級を立て直して、再生させたっていうふうにみんなに思わせるっていう自己承認欲求を持っている。石本先生が担任で嬉しいです、と言われて、教員評価は低いけど、みんな見てみい、みたいなことが確かにある。教員評価が低いのは制度がおかしいからで、教師としての私の価値は子どもと父母が知ってるっていう風に思いたい。克を本当に理解しようとはせず、新自由主義の申し子のように見立てて彼を良い方向に導き、私の指導力を示したいと思ってる。克が嫌いっていうのは、私もそういうところがあるんじゃないかっていう風にもう1回考えていて、だんだん教室がほぐれてくるからあとは克をなんとかするだけっていう風に思ってるんじゃないか。私の指導に入ってこない克を数で包囲して改心させるような指導をしてるんじゃないかっていう風に思いました。私の中に住んでるギャオスが、「お前な、今度こそ覚悟決めろよ」みたいに言ってるような気もしました。克はいじめてるように見えるんだけど、もっと大きなものにいじめられてるかもしれない。克を私の指導の成功エピソードに組み込んで手懐けてしまうのは、違うかもしれない。自分自身は教員評価にも組み込まれないで生きているっていう風に思ってるのに、克を私の成功のためのピースみたいにするのおかしいかもしれない。「僕は傷つきました。差別しないでください」っていうのは、私にはすごく嫌な言葉なんだけど、克はそう言うてるやんって。 純の言葉が聞けるのに、どうして克の、「僕は傷つきました。差別しなしないでください」が憎たらしく感じるんやろうって思って、本当に深呼吸して、差別されてると感じると辛いよね、ごめんねって言ったんです。今までは克から純を守って、あとは克をこっちにって思ってたんだけど、それではどうもいかんと思いました。

9.　克の家族

克の家族っていうのはすごいお家なんです。社会的地位が高く裕福で、地域の名士。お母ちゃんは、すいませんとしか言わない人で、家庭訪問とか個人懇談は夫婦で来て、お父さんが喋りまくるんですね。家庭訪問では、「先生なめてかからないでくださいね」って。「3 年の時は厳しい先生だから不登校もいたかもしれないけど、教室は落ち着いててうちの子は 3 年生の先生が大好きでした。先生が甘すぎだから、殴ってでも言うこと聞かせてください」、って言われたんです。お父さんが私を甘いって言ったのは理由があって、私が連絡帳に「給食エプロンを使った後、丁寧に畳んでいます。見事」って書いたんですね。克のいいとこってそこしかなかったから、そうやって書いたんですね。そしたら、家でも洗濯物をたたんでもらいますって返事が来たんです。お母さんからね。お母さんとやりとりできたから嬉しくて、克に「洗濯物たたんだ？」って言ったら、お父さんが「そんなことは女の仕事やからしなくていい」って言ったって言うからますます嫌いになって、くそっ、克と克のお父さん大嫌いとか思ってたんです。「女の仕事」やって、「殴ってでも言うこと聞かせろ」って、あームカつくムカつく、と。

克はバスケットが得意で八村類みたいになりたくて、バスケットチームに通ってて、お母さんが校門のところまで車で迎えに来るんですね。大変ですねって言ったら、いえ、母親の仕事ですからって言って、会話にならない。で、本当にささいなきっかけなんだけど、「お母さん、克の T シャツ可愛いね、お母さんが選んでんの？」って言ったら、「可愛すぎますか」って言って。お母さんが、実は男の子 2 人やねんけど女の子が欲しかったとか、お父さんは 2 人の男の子を男らしく立派に育てたいと思ってて、子どもがグズグズ言うと手が出るとか、お母さんは結婚してもらったから家事をできるできるだけ頑張って、食事は栄養のある美味しいものを心がけてるみたいな話をしてくれて。「でも T シャツっていうのは私が選べるから可愛いのにしてる。女の子だったら一緒にお買い物行ったり料理作ったりできるのに男の子だからドライバー役ばっかりで、でも克の応援楽しいんです。選抜メンバーに選ばれたらお祝いしようと思ってます」っていうような話を初めてしてくれはって。本当お母さんの T シャツのセンス好きやわって。そこから ポツポツ迎えに来てくれるお母さんといろんな話ができるようになった。本当は働きたいんだけど、お父さんが働く必要ないっていうこととか、子どもを叩くのやめてほしいとか、お兄ちゃんは中学生になったので、1 人前に扱ってやってほしいとか言うから、アドレスを交換して、色々聞かせてねって言っていました。

10.　克の傍らに寄る

克はテストの点は悪くないんです。でも作文は書けない。相変わらず純、下敷き引いてないとか、手いじりするなとか注意する。私は、人のことはいいから、って言う。すると克が「ほっておけませんでした。先生が言わないから言いました」って言う。学級が沈み込む。わーって言葉が出てええ感じ、と思ったら克が、「純、下敷き引いてない」とか言うから私は本当に克が憎たらしかったんだけど、よう考えたら、わーって楽しくなる瞬間に言葉発するってことは、わーって楽しくなるっていうことはわかってるんちゃうかっ

ていうか、もう絶妙のタイミングやから、 なんであの子はそこで言うんやろって。ひょっとしたらあの子は楽しくなるっていう感覚が怖いんじゃないかみたいなことをちょっと考えてみたりしました。教室がわーって楽しくなってくる段階で克がなんか言うぞ、っていうのはだんだん私にもわかってくるから、わーって楽しくなってなんか言うかもしれへんなと思ったら、克のとこ行って、私が克を支えるっていうか、そんなこと言わんでもええけどねっていうような、立ち位置を変えたっていうか。今までは克の視線から純を守ってたんだけど、そうじゃなくて、克のところに行って心配してた方がいいねっていう風に思いました。

11. １学期の懇談で克の父は自分の話ばかり

1 学期の懇談会にも、お父さんとお母さんが揃って来て、お父さんが「勉強はどうですか」と言うので、「頑張ってます」と。またお父さんが「授業の態度はどうですか」って言うから、「真面目すぎるほど真面目です。私が気がつかないところまで注意してくれています」なんて言ったら、お父さんが、そんなこと言われたの初めてですって言って。4 年生ではとにかくボロクソ言われてますから。家ではいい子やねんけど学校とは合わないと思ってたって言って。「学校に合わないと思ってたんですけどね、石本先生が持ってくれてそう言われて嬉しいです」とか言って、お兄ちゃんの話を今度はしだして、へーって、そうなん、そうなんって言いました。でもお父さんにしたら、男らしく育てるつもりで積極的に子育てに関わってきたのに、お父さんの理想の家庭像が揺らぎ始めて、なんだか不安なのかなっていう気がしました。で、お父さんが、克のバスケットも壁にぶつかってるって言って、ゲームを作るのが上手で切り込んでシュートするんだけど、シュート率が悪いっていうようなことを言いました。お母さんに、毎日送り迎え大変でしょって言ったら、克は精一杯頑張ってるんですって。練習から帰る車の中で熟睡してて、家に着いて起こすのがかわいそうで、それでもお父さんとランニングしてるから応援してますって、言ったんですね。今までは長男と 3 人でランニングしてたんですが、長男はもう来ませんわっていう風なことをお父さんが言う。お父さんは仕事の後にランニングをして子どもと一緒にご飯を食べて晩酌するのが楽しみで、その話をずっとする。お母さんはランニングから帰ってくるタイミングで夕食を整え、晩酌に準備をして後片付けをしている。だけど、お父さんは克の疲れもお母さんの仕事も見えてない。私は思い悩んでお母さんに、見えてないお父さんにどう向き合ってもらうか作戦がいるねっていう風に言ったんだけど、お母さんは、「先生、ありがとうございます。でも、あの人は本当に子ども思いで、家庭思いなんです」って言われたりして。そうなると克の背中は、子ども思い、家庭思いの父と、違和感はあるにせよ、理想の家庭を目指す母を背負ってるんやなって。もうお兄ちゃんはそこから降りることができたんだけどあの子は次男で、その中で必死になって頑張ってるっていうか。そう思うとあの子の冷たさ、あの子の必死さ、楽しくなる感覚を受け入れてしまったら自分がもう保てなくなるんじゃないかと思ってるそのカッチコチの体を、嫌い嫌いって言ってるだけではあかんなって。なんて切ない…なんて一生懸命生きているんだみたいなことがちょっとわかりかけて、克の背中を撫でてやりたくなりながら克の後ろに立ち続けたっていう感じでした。二学期は色々あって、自然学校、運動会の組み組体操、音楽会…。克が真面目にリズム刻むからみんながみんなの音に乗れないとか、注文の

多い料理店をやったりとか。色々あったんですけど、克と私が少し違う関係を結びながら二学期が終わって。

12. 「バスケットうまくなりたい　オリオン座」

3 学期は俳句に取り組んで、「バスケットうまくなりたいオリオン座」。ピンと張った感じがあっていいとかみんなが言って、誰やろって言ったら克でした。あの陰険な克が、オリオン座？みたいな。どっちかっていうと、「バスケット上手くなりたい歯噛みする」、とか、「バスケットミスするやつをしめ上げる」とか、そういうイメージだなという感じだったのに。克はお父さんにシュート下手すぎるって言われるって悩んでた時期で、私が、本当にあてずっぽうだったんですけど、「あんた頑張りすぎなんちゃうん。脱力や」って。こう、ホってしたらっていいんちゃうん、ガンってしたら返ってくるんちゃうんって、まあいい加減なことを言ってたんです。これは、組体操とか合奏で、克は真面目にリズム刻むんやけど、みんながのってる時に克だけのれてないリズムを真面目に刻むから、そしてこの時期になるとみんなも言えるようになってたから、「いやちゃうやん」みたいなことを散々みんなに言われてた時期でもあって。それで、私がそうやって言ったら、漫画みたいなんですけど、急にシュートが上手になったんです。神様は見ててくれるね（笑）。克のお父さんがね、「石本先生、お見それしました。先生バスケットのシュートのアドバイスも上手なんですね」とか言うから、いやそんなんしてないけど、と。で、その脱力の感覚っていうのはやっぱり、子どもたちと関われるようになって、学級の中の多様さを楽しめるようになって、少しムフフと笑えるようになって、この頃になると克もムフフって笑って。結衣っていう子が、克の笑い方って可愛いとか言って、ちょっと笑えるようになった。

３学期の初め 5 年生のバスケット交流会っていうのがあって、隣の瓦林小学校とやりました。ここは体育学校かと思うほど、2 学期は 20 分休み全部縄跳びをやらしてるみたいな学校で、自由にさせてやったらいいのにとか思うんですけど、でもめちゃめちゃバスケットとかがうまくて、今まで 100 対 0 とかで負けてたんです。私あんまり好きじゃないんですけど、今年は、克がいるし、サッカーがすごく得意な子とか、女の子でサッカーチームに属してるみたいな子が何人かいる学年で、今年はいけるんちゃうかというようなことを思って、盛り上げるために、「いや、いつもは 100 点で負けてるけどな、今年はひょっとしてひょっとして、ひょっとしたら勝てるんちゃうか」とか、口から出任せを言ってたら、それを聞きつけて勝負事が好きな克のお父さんが私に、「先生、プロの選手が住んでるんです。コーチに来てもらいましょう」って言うから、お金もないしそんなんええって言ったんですけど、プロの選手の方が母校だっていうことで、朝の練習に来てくれはったんです。学校に文句ばっかり言ってたお父さんがそうやって言ってくれはった。朝、私も行くんやけど、克のお父さんっていうのは真面目な人だからね、学校に来て、先生、頑張りましょうって言うの。朝一から頑張りたくないと思うんだけど、頑張りましょうって言うから、はいって言って。お父さんと、一緒に取り組めて嬉しい、ちょっとめんどくさいけど、と思いながらやったわけです。そのプロ選手がすごくって、もちろんパソコンでプロの選手のフォーム見るのも大事だと思うんですけど、もうね、違うの。体育館の中にすっと立ったら佇まいが違うっていう感じで、小学校の体育館の一番端くらいからすっと投

げて、足の筋肉から見事なの。それははあーって思って、みんなの目がハートになって、その選手の方が、「あのね、バスケットっていうのはね、ボールをうまく繋いで、最後シュートするっていうゲームなんだよ。だからボールを繋がなきゃいけないんだよ。だから、体全部を使って楽しんで練習して、お友達のことが好きにならないとバスケットでは勝てないんだよ」みたいなことをまた言うてくれはったんです。これはと思って、聞いた？　克、聞いたかって、そんなはっきり言わへんけど、聞いたかみたいな話になって。やっぱりこの頃は、随分克が変わってきてるんだけど、それでも純はできひんから、ボールがこうきて手出せよと思ったけど顔出すねん。どうして、みたいな感じなんですけど、そうすると純を見てこう舌打ちするわけで。克はこの頃になるとそんなに純を責めてないんだけど、やっぱり歴史があるから、そうなるとみんなヒィってなるんだけど、オリオン座の時に「お父さんと夜ランニングしていて夜空を見上げると星が光っていて、季語を調べるとオリオン座だとわかりました。お父さんが瓦木小学校に勝てるといいなって言いました。僕は勝ちたいです」みたいなことを言っていて。同じ舌打ちなんやけど、舌打ちするのも勝ちたい気持ちなのかな、克はやっぱり勝ちたいって必死になってるのかと思うとちょっと許せるっていうか、純もちょっと怖くはなくなるっていうか、僕のことが嫌いじゃなくて、勝ちたいと思ってるんだって、僕を責めてるんじゃないみたいに思う。純がね、この句を読むと、みんなで練習してうまくなりたい克くんの気持ちが伝わってきますって。克はまたそこでイラッとくるねんけど、そういう風なことがあって、丁寧にボールを繋ぐ人になったんです。

「バスケット上手くなりたいオリオン座」っていうのは私たちの名句になって、100 点を取ったりすると子どもたちが、オリオン座？とか、嬉しいことがあったら、オリオン座？とか言って、なんでもかんでもオリオン座とか言って、克の言葉がみんなの嬉しさになっていくっていうことは、克にとっても 初めてだったし、私たちにとっても初めてだし、克の人を排していた感覚が子どもたちの繋がりの中で違うものになったのはとても嬉しいことでした。

インフルエンザが大流行して（コロナのちょっと前です)、相手チームのエースが何人か休んでて、それで勝ったんです。相手チームボロボロで、瓦林小の校長は「もうやめましょうか」って瓦木の先生に言ったんですけど、瓦木の校長も意地があったから、「いや、今年はやりましょうか」なんて言って、やったら勝ったんです。負けてたとしても、悔しいなっていう風にも言えただろうと思うんだけど、克のお父さんが、こんなボード持って応援してたんだけど、ボードをバーンって割って、勝ったー！勝ったー！ってやって、私たちはキャーって喜んで、めでたいことでした。

2 学期末の懇談会でね、もちろん克のお父さん来てますから、プロ選手を紹介してくださった克のお父さんのおかげですねっていう風に言ってくださる人がいて。4 年生の時娘が家で荒れて心配したけどこんな楽しい 5 年生が過ごせて、って言って、そのお父さんはテレビ局のプロデューサー、ちょっとかっこいいお父さんなんですが、そのお父さんが泣きはって、みんなでおいおい泣いてね。先生、うちの子今になって 4 年生の時怖かったことを言うんですけど、よく頑張ったなって思いますって言って。純のお母さんも、純が学校に行くのが辛かったんだけど、認めたいですって言って。あんなに憎たらしかった克が大好きになって、私たちの中に位置づいて、保護者会の中でも位置づいて、終わった。三

学期も楽しく笑い合って過ごして春休みに打ち上げしましょうねってみんなで言ってたんだけど、5年生で2月末に一斉休校になりましたから…。ちょうどラグビーが流行ってて、ラグビーのハカで6年生を送って、次は私たち僕たちが6年生なんだとかいうのをやろうって言ってて、結衣が、先生一言も口出さんといて、私らが全部やるから、って言って。体育館でもう先生出てって言って、私たちで6年生を送る会をやろうとか言ってガーって盛り上げとったら、安倍さんの一言でパーですわ。それで終わっちゃったんだけど。

決して私が優れた教師だとかそういうことじゃなくて、やっぱり人間っていうのは、いろんな関わりの中で変われるもんなんだって思います。変わってるんじゃなくて、私が変わり、克が変わり、克が変わったことでまた私が変わるっていうか、そういう関係性の中を生きてるんやな、みたいなことを思いました。

13. 「子どもを寿ぐ」とはどういうことか

子どもを寿ぐっていうのは私的に言うとどういうことかって思うと、価値において無限っていうことを、今とか今日とかいうのを徹底的に大切にしてやるっていうか、それをみんなでどういうことなのかなって考えていくっていうこと。明日のために努力するんじゃなくて、今笑うとか、今手を握るとか、今歌うっていうことをもっと大切にしなきゃいけないんじゃないかなっていう風に思います。二つ目は、広島の原爆の中心で子どもを抱きとめながら黒焦げになっていた教師たちというのを時々ふっと思い出すんですけど、阪神淡路大震災で、ゆりの台で地滑りが起こるんですけど、その土に埋まったのを掘り返していくと、お母さんが子どもに被さって自分より1秒でも長く子どもを生かそうとしているような遺体とか、そういうことを色々思うと、大丈夫って、1分1秒でも、大丈夫って、言ってやれる大人になりたいという風なことを思います。子どもの声を徹底的に聞くとか、私はしょっちゅう無力感や孤立感を思うんですけど、それは私だけのものじゃないっていうか。子どもたちと私は全然年齢が違うし、文化も違うんだけど、一緒に生きてることを大切にしながら挑戦していくっていうか。明日の努力がおかしいって言いながらそれはおかしいんちゃうかって思うかもしれないけど、そうじゃなくて、今を充実させようっていう風に一緒に考えていく、ということを思っています。何より、小学校の教師としては子どもたちが「やっぱりおもろかったなあの時」って思うようなことを作ってやりたい。阪神大震災のときの学校でのこともあったけど、そういう、あ一面白かったなとか、人間って捨てたもんじゃないよなとか、それは、子どもたちも思うし、私も思うっていうことを大事にしたいと思う。

それから、直感的な実践っていうのを大切にするっていうか、子どもの悪口を言ってはいけませんとか、そういうことじゃなくて、今日はあの子が許せないと思うことは、それは今日なんだから今日でいいんだけど、その中をくぐりながら新しくなった自分を受けとめて記録したり、みんなに聞いてもらったりすること、というようなことを思いました。私も寿がれること、ってやっぱ書いとかなあかんと思って書きました。一番最初の新任の時のアヤちゃんの手の温もりじゃないけど、やっぱり「皆さん」って言われるようなことでは人間は癒されなくて、言葉を聞き取ってもらって、あなたの言葉をしっかり受けとめたよっていう風に私が言い、そのことをありがとうって子どもが言う、そのことで、

生きるということを肯定していくっていうことが大事なんじゃないかと思っていて、寿ぐという言葉を使おうと思いました。
　価値において無限とはデューイのどこから取ったのかとか、そういうことは言わないでください。あんまり勉強してませんから。でも、そんな風に思っています。
（拍手）

質疑応答　概要

　①実践記録とサークルについて、②働き方改革と子どもも教師も寿がれるということについて、③教師の子どもの見方の変容について、④学校にいかなければならないか、就学を１年延期するなど柔軟な就学についてもっと検討されるべきではないか等、活発な交流が行われた。

（川地）　充実した議論で、まだまだ続けたいところなんですが、もうすでに定刻を 30 分過ぎてしまいました。今日は石本先生、ものすごく充実した、先生の人生と教育実践と、本当にありがとうございました。そして座談会をやれという要望がありましたので、是非それを実現させたいと思います。その際は皆さんにもご連絡したく思います。最後に石本先生に拍手をお送りして閉会といたします。ありがとうございました。

以上

主催　日本教育学会近畿地区　（担当理事：川地亜弥子・渡部昭男）

研究集会のご案内

私の教師生活――子どもを寿（ことほ）ぐ教育を――

日本教育学会近畿地区では、2006 年以来、「戦後教育実践に学ぶ」「私の教師生活」等の研究会を開催し、戦後教育実践について実践者の報告に基づき議論を深めて参りました。下記の通り研究集会を開催します。ふるってご参加下さい。

日　時：　2023 年５月２７日（土）１４：００－１６：５０（予定）

講演者：　石本 日和子 氏

相愛大学講師。元兵庫県小学校教諭。教育科学研究会副委員長等。単著に「被災体験の自己理解と教師の支援―阪神淡路大震災時小学生だった青年の『語り』からの考察―」（『臨床教育学研究』第 4 巻、2016 年）、共著に『道徳教育の批判と創造：社会転換期を拓く』（教育科学研究会道徳部会・藤田昌士・奥平康照編、エイデル研究所、2019 年）、『コロナ時代の教師の仕事』（教育科学研究会教室と授業を語る部会編、旬報社、2020 年）等。

会　場：　神戸大学大学院 人間発達環境学研究科　Ａ棟４階　Ａ４２７室

（神戸市バス 36 系統「神大（しんだい）人間発達環境学研究科前」下車、徒歩すぐ）
アクセス（「鶴甲第２キャンパス」を見て下さい）　キャンパス内マップ

申し込み・問い合わせ先：　神戸大学　川地亜弥子　seminar.kawaji(あ)tiger.kobe-u.ac.jp
※（あ）を@（半角アットマーク）に置き換えて送信して下さい。
※　当日参加も可能ですが、資料準備の都合上、お申し込み頂けると大変助かります。

私の教師生活７
印刷　２０２４年７月２０日
発行　２０２４年７月２８日

編　者　日本教育学会 2023 年度近畿地区研究集会　神戸企画担当
　　川地亜弥子・渡部昭男
印刷所　神戸大学生活協同組合

（非売品）